



TITLE:

# 八日市の起源と歸化人

AUTHOR(S):

菅野, 和太郎

---

CITATION:

菅野, 和太郎. 八日市の起源と歸化人. 經濟論叢 1927, 25(3): 456-459

ISSUE DATE:

1927-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128575>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會

# 經濟叢論

第三號

第二十五卷

昭和二年九月一日發行

## 論叢

營業稅の課稅物件の地方分別難 法學博士 神戶 正雄  
文化現象の凝集作用 法學士 恒藤 恭  
純粹國家 法學士 作田 莊一

## 時論

獨逸社會民主黨の農政綱領 法學博士 河田 嗣郎

## 說苑

琉球の廢藩と日支兩屬關係の終末 法學博士 山本美越乃  
植民及び植民地の意義 經濟學士 長田 三郎

## 雜錄

英領東アフリカの現状と其將來 經濟學士 田島 正雄  
同盟罷業保險の現状 經濟學士 近藤 文二  
八日市の起源と歸化人 經濟學士 菅野和太郎  
地方財政と累進稅比例稅 法學士 沙見 三郎

## 法令

議院法中改正法律・震災手形處理委員會官制・公益質屋法施行規則・米及穀の輸入稅免除の件廢止

# 八日市の起源と歸化人

菅野和太郎

## 一

凡そ交換なる現象が社會に生ずれば、間もなく其交換が定期的に且つ一定の場所に於いて行はるゝこととなる。其場所が即ち市であつて、世界各國に於ける商業の發達を見るに、市の發生せざる處は殆んどない。我國に於いても市は既に古代より發生し、當時に於ける交換買賣は多く市に於いて行はれた。

市に關する各種の記録及び魏史の東夷傳にある「國々有市交易有無」の句は、我國古代に於いて、各地に市の存在せしことを證するものであり、更らに孝德天皇紀によれば大化二年の詔りに「市司要路津濟渡子の調賦を罷め」云々とありて、當時各地に市司なるものゝ在りしより見れば、市が當時交換買賣上に重要な役割を演じたりしことを知ることを得る。

古代に存在せし主なる市を舉ぐれば、先づ市を立てたる記事の始めは、應神天皇の立てられし大和の輕市である。河内にありし餌香市も有名なる市であつて、此市に關する記事が雄略天皇紀及び顯宗天皇紀に見えて居る、武烈天皇の末代皇太子の時、影媛を眞鳥大臣男鮪と爭ひたりといふ大和の海柘榴市も有名なる市であ

## 第二十五卷

四五六

第三號 一五六

つて、此市は當時繁榮し市日に多くの人が群集せしため、海柘榴市に於いて罪人を處刑せしことが、敏達天皇紀に見えて居る。其他有名なる市としては、難波の津より大和の帝京に通する要路にありし河内の阿斗桑市及び聖德太子の立てしと傳ふ大和の三輪市を舉ぐることを得る。

かくの如く古代に於いては各地に市の存在せしこと明であつて、記録に憑るべきものはないが、近江にも古代より市の存在せしことは想像するに難くない。今日相當繁榮し、市日に附近の村落民が群集する滋賀縣神崎郡にある八日市は、既に古代に發生せしものとせられ、然かも今日に至る迄存續して居る市である。

## 二

八日市は現在八日市町として神崎郡内に存在するが、其名は古へ小脇の八日市より出でしものであつて、其前身は蒲生郡にありし小脇市である。八日市の起源に就きては確然たる記録なきため、之を確言することを得ない。只纔か

1) 日本書紀 (經濟雜誌社發行國史大系第壹卷) 442頁

2) 帝王編年記第五 (存探叢書) 3) 日本書紀 252頁 4) 同書 266頁

5) 同書 278頁

に憑るべきものとして始めて記録に現はれしは源平盛衰記である。其原文に「曉に守山を立ち野洲の河原に出でぬ、如法曉の事なれば旅人も未だ見ざりけるに草鞍置きたる馬追ふて男一人見へ来る、高綱和殿はいづくの人ぞ何へ渡るぞと問へば、是れは栗太<sup>○</sup>者にて候が、蒲生郡の小脇<sup>○</sup>の八日市へ行く者なりと答ふ……」とあるを見れば、八日市は既に源平時代に繁榮せしことが明である。

八日市の起原に就きて一傳説として聖德太子が創め給ひしものであると稱せられて居る。これは八日市より程遠からぬ瓦屋寺と關聯して唱へられし説にして、今日殘存する八日市々神本記に「推古天皇の朝聖德太子が難波の荒陵に四天王寺を建立せられし時、神崎郡白鹿山の東麓の土を以つて瓦を作り給ひ、其地に一寺を建立して瓦屋寺と號し、且つ白鹿山の巽梓川の北に民屋數百戸を置き、同天皇九年辛酉三月八日始めて市民を開き交易の道を教へ給へり」と書かれてある。此本記は慶長十五年に書かれしも

のであつて、其文中に首肯し難き點少くなく、或ひは八日市内にある市詞の由來を殊更らに誇張せしものなるやも計り難く、従つて此説は信するに足らぬ。

八日市の起原に關する他の傳説は天智天皇四年の創始なりとするものにして、此説は論著に採録されて居る。<sup>8)</sup>此傳説に就き市大明神記に左の如く記されて居る。

「夫淡海劔神前縣柿御園莊高屋卿大脇市一稱八日市……中略……抑勸諸人皇三十九代天智帝御宇四乙丑歲卯月大脇市創立……下略」かくの如く八日市の起原に就きては種々の説ありて、孰れを眞なりと容易に判定し難いが、市大明神記中の八日市は粟津市牧市眞野市息長市平が市栗田市伊香市と共に近江に於ける八大市場であるとの記事より見れば、粟津市は既に天武天皇時代に存在せし市なる故、八日市も既に早く古代の末期又は中古の初期即ち大化改新前後に發生せしものならんかと想像せられ

6) 同書 359頁 7) 同書 355頁

8) 牧野信之助氏推籃期に於ける近江商人(日本商人史) 146頁蒲生郡志卷五 551頁

9) 日本書紀 496頁

三

八日市の起源に關する上述の傳説の一是、聖德太子が瓦屋寺を建てしことに關聯し、他の説は天智天皇四年とあるが、此兩傳説の裏には歸化人との關係のあることを見逃してはならぬ。瓦は元來我國固有のものでなく、崇峻天皇の元年百濟國より渡來せし瓦博士麻奈父奴、陽貴文及び陵貴文<sup>10)</sup>によりて、其製造が始まりしものである。推古天皇の元年に建立せられし四天王寺<sup>11)</sup>は瓦博士渡來後僅か五年を閲せしに過ぎざる故、神崎郡に於いて天王寺の瓦を製造したるがためには、其處に歸化人の參加せしこと明である。従つて前に引きし八日市々神本記の文中に民屋數百戸を置くとは、恐らく歸化人を瓦屋寺の附近なる八日市の所在地たる小脇に移住せしめしものであらう。又八日市を創めし年なりといふ天智天皇の四年には百濟の百姓男女四百餘人が神前郡に移住して居る<sup>12)</sup>。要するに傳説に傳れる八日市創立の年に歸化人が移住せりといふことの反面には、八日市の起源と歸

化人との間に何等かの關係のあることが想像せられる。

尙八日市の附近にも多くの歸化人の移住せしことが、他に記録に現はれて居る。例へば八日市の近村にて東に當りて駒寺といふ小部落がある。元來駒寺は高麗寺と書きしものであつて、此寺のありし部落を高麗村<sup>13)</sup>と稱した。仁德天皇の朝に後漢の苗裔鄧言興并帝利等が高麗より歸化して此處に居住せしため<sup>14)</sup>、高麗村と稱せられしものである。更らに八日市の附近に狛長者の傳説が少くない。元來狛は高麗の略字なれば、狛/長者は高麗よりの歸化人である。高麗滅亡後其亡民我國に歸化し、其一部が近江に移住せしものにして、其高麗人が八日市の附近なる蒲生野に居住せしため、狛/長者の傳説がある所以である。例へば中野村太字小脇にある金柱宮に祭りし金柱は即ち古麻長者の持佛である由。尙中野村には狛川又は狛井と稱する小川がありて、愛知川より水を堰きて、神崎郡の二三村を過ぎ、八日市町より中野村を流れ、下流

10) 日本書紀 369頁 11) 同書 373頁 12) 近江輿地志略卷七十 13) 日本書紀 478頁 14) 近江輿地志略 15) 續日本紀(國史大系第二卷) 346頁

は市邊、老蘇二村の水田に灌いで居る。これは  
狛氏が蒲生野を開拓し、遠く愛知川の水を引き  
て水田となせし遺跡である。更らに應長元年  
(花園天皇)十二月の内野共有の田券に此一帯の  
地を狛野郷と記して居る。<sup>10)</sup>

#### 四

以上によりて歸化人の移住せし年に八日市創  
立の傳説があり、且つ八日市の附近に多くの歸  
化人が居住せしことが明である。従つて八日市  
の創立には少く其歸化人が參加し、又歸化人が  
主として八日市に集合して相互に財貨の交換賣  
買を行ひしことが分る。

抑も市なる制度を古代の日本人が自然的に創  
案したるか、又は他の制度文物と同じく當時先  
進國たりし支那朝鮮より既に存在せし市制度を  
移入せしものであるかは、之れを容易に斷定し  
難いが、恐らく古代に發生せし市の内には主と  
して歸化人又は外國人の參集せしもの又は歸化  
人が創立せしもの、あることは、八日市以外に  
尙例へば先きに擧げし餌香ノ市を引くことを得

る。即ち餌香ノ市のありし河内の古市には、河  
内ノ書首<sup>17)</sup>居住せしが、河内ノ書首は應神天皇  
十六年に來朝せし王仁<sup>18)</sup>の子孫<sup>19)</sup>にして、王仁の  
子孫は我國渡來後引續き此地に居住せし故、彼  
等が餌香ノ市を創めしものなるやも知れず。尙  
百濟國虎王の子孫たる古市ノ村主<sup>20)</sup>も此地に居住  
し、更らに餌香ノ市に於いては高麗人が來住し  
て旨酒を醸み、時人競つて高價を以つて買飯せ  
しことが釋日本紀<sup>21)</sup>に記せられて居る。以上の  
八日市及び餌香ノ市の例によりて我國古代に存  
在せし一部の市には、所謂「國際性」を帶びしも  
の、あること明であつて、我國商業の發達に歸  
化人の少からず貢獻せしことを知ることが出來  
る。

7頁 17) 日本書紀 249頁 18) 周書 184頁

古語拾遺(經濟雜誌社發行——群書類從第十六輯) 9頁  
[類從第十六輯] 208頁  
〔系第七卷〕 677頁